

## 伊達政宗の小田原参陣と浅野長吉

—当館寄託「杉浦家文書」の史料紹介を兼ねて—

佐藤 貴浩

はじめに

天正十八年(一五九〇)三月一日、豊臣秀吉は前年の小田原北条氏による名胡桃城奪取事件を理由に、北条氏を滅ぼすべく関東に向けて出陣し、四月には小田原城の包囲を開始した。いわゆる小田原合戦の始まりである。北条氏は、武田信玄や上杉謙信といった戦国の名将を退けた名城小田原城に籠城し、長期戦に持ち込もうとした。しかし、圧倒的な大軍と経済力を有する秀吉の前には、さしもの名城小田原城もなすすべなく七月五日に降伏した。

昨年十一月に公開された映画「のぼうの城」は、小田原城が落城した後も頑強に抵抗を続けた忍城代成田長親の活躍を中心に描いた作品で、埼玉県内は映画の舞台となった行田市を中心に活気づいている。最近の戦国ブームによる盛り上がり契機として、郷土の歴史が注目されることは素晴らしいことであろう。

さて、北葛飾郡松伏町に所在する杉浦家から当館に寄託された「杉浦家文書」には、一通の伊達政宗書状が伝来している。これは、(天正十八年)五月二十八日付のもので、浅野長吉(長政)に宛てたものであり、まさに「のぼうの城」の時期と重なっている。そこで、本稿では、まず史料紹介を兼ね「杉浦家文書」の概要について述べ、次い

で政宗書状の内容と研究史上における位置づけを整理し、最後に政宗書状の内容と深くかかわる長吉の動向を追いかけた。これにより「のぼうの城」には描かれなかった埼玉県における小田原合戦の一端を概観できればと考える。

### 一 「杉浦家文書」の概要

「杉浦家文書」は全二〇三点で、中世文書は二点ある。文書群には複数の家譜類が残されており、それらに基づき杉浦家について紹介しよう。

杉浦家の祖は美濃国竹ヶ鼻城主の定元で、定元は織田氏・豊臣氏に仕えた。一般に竹ヶ鼻城主は、杉浦重勝の名で知られており、定元はこの重勝と同一人物であろう(以下、家譜に従い定元とする)。慶長三年(一五九八)の秀吉死去後、定元は石田三成が徳川家康を滅ぼそうとしていることを見抜き、一方でこれからは家康の時代が来ると考えていた。そこで、自らは秀吉の遺児秀頼への忠義を尽くすため豊臣氏に仕え続け、代わりに息子の定政を家康の家臣伊奈忠次に任せさせた。慶長五年に関ヶ原合戦が起こると、西軍に属した定元は池田輝政・福島正則等の攻撃を受け、竹ヶ鼻城で討死した。そのため東軍に

属した定政が杉浦家を継承し、家譜類はこの定政を初代としている。

定政が忠次に仕えた背景には、定政の妻が忠次の妻と姉妹であり、伊奈氏と親戚関係にあったことがある。そのため忠次の配下として秩父領十万石を支配したという。屋敷は下総国船橋に構えていたが、慶長十三年に家康が意富比神社の再建を企図した際、定政の屋敷が新社殿の地に選ばれたため、替地として武蔵国葛飾郡大川戸に移ることを命じられた。大川戸は、慶長五年に家康が上杉氏攻撃のため下野国小山まで東進した後、江戸に引き返す際、忠次に命じ御殿を築かせた場所である。そして、その普請にあたったのが定政であった。結局、御殿は使用されなかったため、家康から忠次に下賜され、それが船橋の替地として忠次から定政に下賜されることになったのである。ちなみに、「杉浦家文書」には、御殿普請に際して家康が自筆で認めた坪割状が残されている。

定政没後、歴代の当主は浪人となったり帰農したりなどしたが、伊奈氏の家督相続問題などに関する重要な史料も伝えている。また、元禄時代の絵図も残されており、当時の御殿の様子を知ること出来る。以上のように、杉浦家は戦国の動乱を見事に生き延びた由緒ある家で、文書群自体も家康自筆の文書が伝来するなど、非常に貴重なものである。

さて、杉浦家に政宗書状が伝来した理由は何だろうか。七代目の勝定は、赤穂浅野家から分家した旗本浅野家（播磨国加東郡家原領）の家老安達文左衛門の二男で杉浦家に智養子となったといい、政宗書状の宛所である浅野家との関連を窺わせる。しかし、このことと杉浦家に政宗書状が伝来したことを結びつけるのはやはり困難であろう。し

たがって、本稿では、残念ながら、伝来の過程については不明とせざるを得ない。

## 二 政宗書状について

秀吉は、小田原合戦に際し、奥羽の諸大名に対し、自らのもとへ伺候し、従属の姿勢を示すように命じた<sup>2)</sup>。その結果、奥羽の諸大名の多くが小田原に参陣することになった。政宗は、四月十五日に本拠地黒川を出発したが、途中で北条領国を通過することが不可能であることを知り、一旦黒川に戻った。そして、改めて百騎程度の家臣を率いて五月九日に出発し、北条領国を避け、越後・信濃・甲斐を経て小田原に向かった。「杉浦家文書」の政宗書状は、政宗が甲斐に入った段階で認めたものである。

史料一 伊達政宗書状〔杉浦家（伊奈家臣）一八二〕

〔(複製)墨引〕

猶々彼書状認候内、良覚院罷帰候、条々御理共、本望至極二候、併貴辺憑入候首尾、御本陣へ御参之義、待入迄候、以上、先立如申述候、漸昨廿七、甲府之地迄罷登候、雖然貴辺武州口御在陣之由候条、先々当地ニ令滞在候、別而憑入候筋目、早速御本陣へ被打返、万々御執成憑入迄候、遠境相登之義共候間、諸事不知案内二候、不可過御塩味候、彼依御返札、則可致参陣候、書余期会面之時、不具候、恐々謹言、

五月廿八日

政宗（花押）

浅野弾正少弼殿

御陣所



史料1 伊達政宗書状

まず、史料一の基本情報について紹介しよう。筆跡は右筆で、料紙は斐紙の切紙である。法量は縦17.0cm×横47.0cm。花押は縦3.2cm×横9.0cmで、いわゆる「セキレイの花押」として有名な公用花押の天正十七〜十八年型である<sup>3)</sup>。

内容は、政宗が二十七日に甲府についたことを長吉に知らせ、長吉が武州口に出陣しているため、長吉に早く小田原に帰陣してもらい、その上で長吉の「御執成」をもって秀吉と面会したい、というものである。政宗と豊臣政権との交渉には、天正十七年から長吉が現れるようになっていた<sup>4)</sup>。なお、良覚院は伊達氏の崇敬厚い本山派の修験者で、政宗の使僧である。

さて、史料一は政宗の小田原参陣の過程を知るうえで重要な意義を有しており、小林清治氏と黒田和子氏がそれぞれ史料一を取り上げている<sup>5)</sup>。

小林清治氏は、徳川家臣の内藤清成が記したとされる「天正日記」に、六月一日及び二日に小田原で政宗が結城秀康の仲介で家康に会い、四日には家康・秀康に伴われて秀吉に面会したとの記述がある一方で、政宗自身は家臣に宛てた六月六日付書状の中で、小田原参陣を「昨日五日当陳<sup>神</sup>へ参着候」と述べていることを指摘した(「登米懐古館所蔵登米伊達家文書」)。その上で、当時新発見史料であった史料一を全文引用し、「『天正日記』の記述が正しいとすれば、六月一日結城秀康と共に家康を訪れるためには、その前日の五月三十日には秀康との間に諒解をとりつけておく必要がある、そのためにはさらに二十九日まで小田原に到着しておくことが自然であろう」とした上で、史料一にあるように五月二十八日時点で甲府にいたとするならば、「天正日記」

の記述は成立し難いとされた。そして、結論としては政宗自身の言葉に基づき、六月五日に小田原に参陣したとし、「天正日記」の信憑性についても疑問視する。

一方、黒田和子氏は、五月二十四日付の長吉宛政宗書状に「甲州<sup>府</sup>中二一兩日中令滞留、御本陳江被打掃事可待入候」(「浅野家文書」)とあるのを引用した上で、次のように述べた。

先の、五月二十四日付書状は、何処で認めたものか判然としな  
い。甲府に既に到着しているようでもあり、甲府へ二、三日の地  
点に居るようにも受けとることができる。そして二十八日付書状  
で、「漸昨廿七甲府之地迄罷登候」と強調しているのは、既に二  
十四日、甲府入りした政宗は困惑しきつて家康に頼ることを決意  
し、密かに小田原に赴くことをカモフラージュするためにことさ  
ら二十七日の甲府着と、二十八日に甲府で書状を認めたことをア  
ピールしているように感じられる。二十四日に甲府に到着してい  
れば、二十九日までに小田原へ入ることは十分に可能である。

たとえ二十八日付の書状が真実であるとしても、小林氏の説か  
れるように、五月三十日に秀康との間に諒解を取りつけておきた  
めに、必ずしも二十九日に小田原に到着する必要はなく、三十日  
の朝到着してその日のうちに諒解を得ることもできるわけであり、  
二十八日早朝、甲府を発つて、二十九日夜或いは三十日朝、小田  
原到着は不可能ではないと思われる。

黒田氏は以上のように述べ、六月一日に長吉には内密のまま政宗は

家康と面会したと推測した。小林氏が「天正日記」の記述を否定し、  
六月五日小田原参陣とするのとは見解を異にする。

五月二十四日付書状と史料一の関係について、黒田氏は前掲のよう  
に解釈しておられるが、先に部分引用した二十四日付書状は、「甲州  
府中に一・二日滞任して、長吉が小田原に帰陣するのを待つつもりで  
ある」と解釈することができ、甲州府中に到着する直前に、今後の予  
定を述べたものと解釈することが可能である。つまり、史料一にある  
通り、二十七日甲州府中着でも何ら問題はないのである。

また、田中義成氏以来「天正日記」が偽書とする説が有力となつて  
おり、六月一・二日に政宗が小田原にいたということも考えがたい。

さらに、黒田氏は政宗が家康を頼ることを長吉にカモフラージュし  
たと指摘するが、そもそも秀吉との対面は主従関係を確立させる一環  
の公式な行事である。したがって、誰の執り成しによつて秀吉と対面  
したのかを隠し通せるような類のものではない。ちなみに、政宗とは  
やや立場が異なるが、最上義光は家康の執り成しによつて秀吉と対面  
した旨を長吉に伝えている(「浅野家文書」)。

よつて、政宗の動向については、政宗の言葉を素直に受け止め、史  
料一にあるように二十七日に甲州府中に到着し、二十四日付書状で長  
吉に伝えたように、長吉の小田原帰陣を待ち、六月五日になつて小田  
原に参陣したと考えるのが妥当であろう。甲州府中から小田原までは  
二日もあれば十分の距離であるから、六月五日に小田原に着いたとす  
れば、政宗は「一兩日」どころか、随分と長く長吉の帰陣を甲州府中  
で待っていたということになる。

### 三 浅野長吉の武州侵攻

さて、このように政宗は長吉に頼りきりであったが、一方の長吉は当時どのような状況にあったであろうか。次にこの点を見てみたい。

長吉は、秀吉に先んじて二月二十八日に京都を出陣した(「晴豊公記」)。そして、小田原包囲中の四月二十六日に、家康家臣の本多忠勝・鳥居元忠・平岩親吉等と共に「関東筋」を攻略するように秀吉から命じられた(「家忠日記」)。小田原を発った長吉は江戸城に向かい、二七日に江戸城の請取が完了したことを秀吉に報じ、それを受けた秀吉は、二八日付で、前田利家等の北国勢が川越に向かうので、長吉達も合流するように命じた(「浅野家文書」)。二十九日に、長吉は足立郡浦和郷や葛飾郡の郷村宛に禁制の取次を行っている(「浦和宿本陣文書」・「武州文書」)。

月が改まった五月一日には、下総庄内十六郷に宛てた禁制の取次状を長吉が発給しており(「野田市立興風図書館所蔵文書」)、この頃には下総方面の鎮定に向かったようで、五日には小金城、十日には東金城・土気城の請取を行っていた。秀吉は、東金城・土気城の請取の旨を長吉から報告されると、一二日付で急ぎ鉢形城へ向かうよう長吉に命令した(「難波創業録」)。しかし、依然として長吉は鉢形城に向かわず、二十日付で秀吉は怒りに満ちた文言で長吉を厳しく叱責している(「浅野家文書」)。秀吉が叱責の朱印状を認めていた二十日に長吉は岩槻城を攻めていた。それに関する史料を掲げる。

史料二豊臣秀吉朱印状〔当館所蔵「平岩文書」〕

武州岩付城二・三之丸迄追破、頸数多討捕候旨、浅野弾正少弼・

(長吉)

木村常陸介かたより、昨夕注進候二付而、様体被仰合、御上使両三人被差越候、其趣、弾正・常陸可申聞候、各同前二無油断城取詰、一人も不漏可討果候、女子共ハ、悉此方へ可差越候、引散候者可為越度候、委細両三使可申候也、

五月廿二日

(秀吉朱印)

本田中務少輔とのへ

鳥居彦右衛門尉とのへ

平岩七介とのへ

二十日に開始された攻撃で、岩槻城は二・三の丸を落とされ、本丸を残すのみとなり、長吉は秀吉にその旨を注進した。それに対し秀吉は敵兵を一人も残らず討ちとるように命じた。

結局、岩槻城は二十二日に落城し、長吉は秀吉に無断で城中の者達を助命した。そのことについて、二十五日付の秀吉朱印状は、長吉の判断を「沙汰限」とし、今後同様の事をした場合「曲事」とすると糾弾している。そして、早々に鉢形城攻めに加わるべしとの厳命を再び下した(「浅野家文書」)。

しかし、その後もしばらく長吉は岩槻領の戦後処理にあたっていたようで、六月一日には鴻巣郷に宛てて還住令を発している(「大嶋文書」)。また、六月三日付で前田利家が配下の長連龍等に宛てて、松山で長吉と合流し、鉢形城を攻めるように指示をしている(「寸錦雜編」)。つまり、長吉は三日の時点ではまだ鉢形城に至っていないのであり、鉢形城は、六月十四日に落城したとされ、日付を欠くものの六月日付木村一・浅野長吉・前田利家の連名で鉢形城の請取に関する定が

表1 7日の譴責使一覧

記録名	人名				
	浅野長吉	施楽院全宗	稲葉是上坊	外両人	
伊達日記	浅野長吉	施楽院全宗	稲葉是上坊	前田利家	増田長盛
奥羽永慶軍紀	浅野長吉	施楽院全宗	稲葉是上坊	前田利家	(富田一白)
治家記録	浅野長吉	施楽院全宗	色部是常坊	(前田利家)	
会津四家合考	浅野長吉	施楽院全宗	宮部継潤(善上坊)	-	
武徳編年集成	浅野長吉	施楽院全宗	宮部継潤(善上坊)	-	
松窓漫録	浅野長吉	施楽院全宗	宮部継潤(善上坊)	福原高直	-

※治家記録は伊達日記の記述に基づく。( )内は治家記録編纂者の按文

公布されている(町田文書)。これにより、少なくとも落城直後には、長吉が鉢形城に在陣していたことが明らかである。その後、長吉は忍城攻めに向かい、七月三日には皿尾口での活躍を秀吉に賞された(浅野家文書)。

さて、政宗は前述の六月六日付書状の中で、「浅弾・利家鉢形表二在陣候<sup>(陣)</sup>、從関白様昨日迎<sup>レ</sup>御越、此陣へ被招、指南<sup>ヲ</sup>可被仰付之由候、然時者、万々仕合共、可能坎与存候」と、鉢形城にいる長吉と前田利家が秀吉から呼び戻されたという伝聞を記し、これが本当であれば秀吉との面会もうまくいくであろうとの見通しを立てている(「登米懐古館所蔵登米伊達家文書」。実

として政宗のもとに派遣されたとある(表1)。だが、七日付の秀吉朱印状写には「既鉢形江者、越後宰相中將<sup>(上杉景勝)</sup>・加賀宰相<sup>(前田利家)</sup>・浅野・木村を初而五万余被差向候」とあり、むしろ長吉を鉢形城に派遣したことを述べている(「諸將感状下知状并諸士状写」)。果たして七日に長吉はどこにいたのだろうか。

長吉の動向を直接示す史料は存在しないが、利家の動向を示す文書は存在する。それは、小田原にいた岡田利世の六月八日付書状である(「源喜堂古文書目録」一一)。長文のこの書状には「一、忍の城御せめ

候んとて越後衆・羽筑前殿に仰せ付けられ候、昨夕この地まで御越し候間、今朝すくにおしへ御越し候」とあり、利家が七日夕刻に小田原まで来ていたことが判明する。

これに先立つ四月二十日、利家は上野国松井田城を降し、二十一日には松井田城を発ち(「伊達家文書」)、二十二日に小田原城で秀吉に面会している。つまり、松井田<sup>と</sup>小田原間は二日あれば移動可能だったのであり、鉢形<sup>と</sup>小田原間の移動も一日半もあれば十分に可能であったろう。すると、政宗が聞いた噂のように、五日夕刻に秀吉が使者を鉢形城に派遣したとすれば、六日に使者が鉢形城に到着し、それを受けた利家が七日夕刻に小田原に着陣するのは十分に可能である。

おそらく、長吉は三日以降に長連龍等と松山で合流し、四・五日頃には鉢形城攻めに加わり、秀吉の使者を受けて、利家と同道し小田原城に向かったのであろう。そして、種々の記録にあるように、七日に政宗への譴責使を務めたものとみられる。『治家記録』の編者が推測するように、当然利家も譴責使を務めたはずである。

政宗は譴責使に対し、秀吉に臣従していた会津の芦名氏を攻め滅ぼしたことなどの申し開きをした上で、九日に秀吉と対面した(「宮城県立図書館所蔵文書」)。「伊達日記」などによれば、家康が執り成しを行ったようである。その場には前田利家もいたとされるが、先の岡田利世書状にある通り、八日の朝には小田原を出発し鉢形城に向かつており(書状は忍とするが時期的に違う)、秀吉と政宗の対面の場には不在だったはずである。もちろん長吉も利家と同行し鉢形城攻めに戻ったのであろう。

政宗の服属は豊臣政権にとっても極めて重要な局面であり、秀吉は

わざわざ利家と、長吉を小田原まで呼び寄せていたとみられる。しかし、秀吉は鉢形城攻めを重要視しており、その主力となる北国勢の中心人物である利家と、徳川氏の別動隊を率いる立場にあった長吉をいつまでも小田原に留め置くこと避けたかったはずである。そこで、わずか半日ばかりの滞在で、再び両人を鉢形城に戻したのだろう。その結果、秀吉と政宗の対面は家康の執り成しによって実現したのである。

おわりに

「杉浦家文書」に見るように、政宗は長吉の小田原帰陣を待つており、長吉に頼るところ大であったが、一方の長吉は秀吉によって呼び戻されなければ、政宗のために小田原に戻ることはなかったであろう。なぜなら、戸谷穂高氏が指摘しているように、長吉は政宗のために奔走する意思は希薄だったのである。このことは、政宗が甲州府中で数日待ったにもかかわらず、長吉が小田原に来なかったことに端的に表れている。長吉が小田原に戻ったのは、秀吉に呼び戻されたからに過ぎなかったものであり、七日に政宗のもとに赴いたのは、政宗の芦名氏討滅や小田原遅参を厳しく追及するためだったのであろう。その役目が済むと、八日の朝には早々に利家と共に鉢形城に戻ったとみられる。小田原参陣から六年後の文禄五年(一五九六)に政宗は長吉に対し、著名な長文の絶好状を認めている(「天理図書館所蔵伊達家文書」)。小田原参陣の際に見られる政宗の長吉に対する期待と、豊臣政権が長吉に求めた立場の間にはずれが生じており、それが後の政宗と長吉の関係が破綻する一因となったのであろう。

以上、「杉浦家文書」に伝来した一通の政宗書状を中心に、その歴

史的背景について概観した。本文書は本文中で紹介した伊達政宗研究における研究史上の意義だけでなく、豊臣政権のあり方を考えるうえでも極めて重要な史料といえるのである。

(1)高柳光寿・松平年一編『戦国人名辞典増訂版』吉川弘文館、一九八一年。

(2)小林清治『奥羽仕置と豊臣政権』吉川弘文館、二〇〇三年。

(3)『仙台市史 伊達政宗文書』仙台市、一九九四年。

(4)山本博文『幕藩制の成立と近世の国制』校倉書房、一九九一年。

(5)小林清治『伊達政宗の小田原参陣』(『日本歴史』二六四、一九七〇年)、黒田和子『浅野長政とその時代』校倉書房、二〇〇〇年。なお、小林氏は史料一の発見を受けて執筆されている。

(6)田中義成『豊臣時代史』講談社、一九八〇年。初出一九二五年。なお、田中氏が偽書とする根拠の一つに、本文で述べた政宗自身が五日小田原参着と述べていることに「天正日記」の記述が矛盾することを挙げている。

(7)なお、当該期の長吉について触れたものとして、戸谷穂高「天正・文禄期の豊臣政権における浅野長吉」(『遙かなる中世』二二、二〇〇六年)、同「小田原合戦と葛西」(平成十九年度特別展「関東戦乱」葛飾区郷土と天文の博物館、二〇〇七年)、梯弘人「豊臣期関東における浅野長政」(『学習院史学』四九、二〇一一年)等がある。

(8)『千葉県の歴史』通史編・中世、千葉県、二〇〇七年。

(9)『小田原市史』通史編原始・古代・中世(小田原市、一九九八年)によれば、長吉が鉢形城に急行しなかった理由は、北条氏邦が降伏の姿勢を見せており、その交渉をするためだった可能性があるという。

(10)『寄居町史』通史編、寄居町教育委員会、一九八六年。